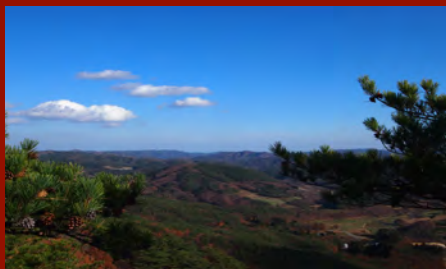


山津見神社天井絵復元プロジェクト

ニホンオオカミは1905年に東吉野で捕獲されたものを最後に絶滅したとされる。かつては山の神の使い「ご眷属様」「大口真神」とされ、農耕の神であり、様々な災害からの守神であった。地震、津波、火災、疫病が頻発し、黒船来航が世情を揺るがした江戸末期（安政）には、救済の力があるとされるオオカミの護符が多数発行された記録がある。

福島県相馬郡飯館村佐須に鎮座する山津見神社は山の神「大山祇神社」を総本山とし、そのご眷属様（狼）を、虎捕山山頂の本殿、麓の拝殿に祀る。虎捕山は山頂が海からも見えることから、海の神でもあり、人々の暮らしを守る里の神でもある。拝殿の天井には狼絵が237枚描かれ、その信仰の厚さを物語っていた。絵が描かれたのは1905年（拝殿完成年）であるが、それは最後のニホンオオカミが捕獲された年である。

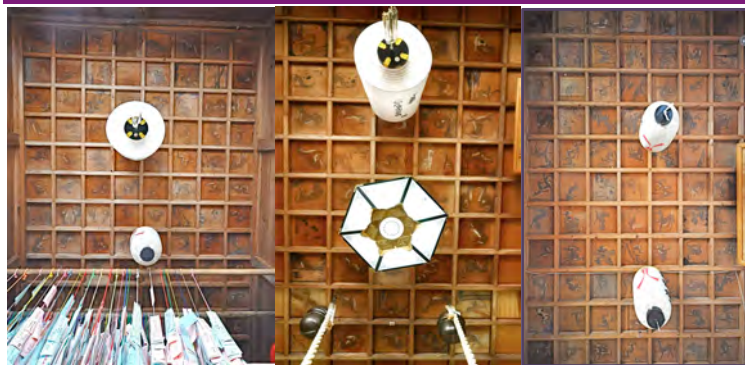
山津見神社は避難区域となりながら、地域の神社であり続けた。私たちが初めて訪れた2012年の暮、「保存状態がよくない」



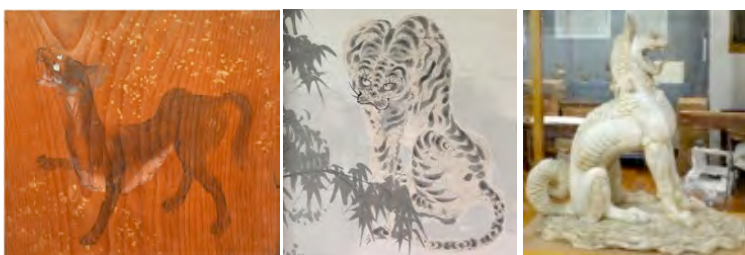
という宮司夫人の懸念を聞き、せめてデジタル保存をと、絵を一枚ずつ写真に収めた。3月末完成した写真集をお届けしようとした矢先、神社は全焼、夫人が命を落とされるという不幸な結果となった。種の絶滅、特に野生動物の絶滅は、人間と土地とのつながりの一側面が失われることであると考えられる。信仰の対象でありながら絶滅に追い込まれた狼、その狼が狛犬として今、避難地域にたたずんでいる。自然信仰はその形も対象も多様だが、それぞれ地域の生業と深い関わりがある。その信仰の背景を理解することは、避難という、人々がその土地から切り離される惨事を作ってしまった社会を問うことではないだろうか。

天井絵の理解や復元の過程が地域と土地とのつながりを再確認し、回復の一助となればと思う。それは地域への願いであり、地域を思われた故人へのせめてものご供養と考える。

絵復元アプローチ：絵の歴史背景や制作の詳細を理解する過程を地域プロジェクトとする：天井絵は久米中時宮司(1844-1919)が私財を投じ1905年に完成させたが、元相馬中村藩御用絵師によること以外詳細不明である



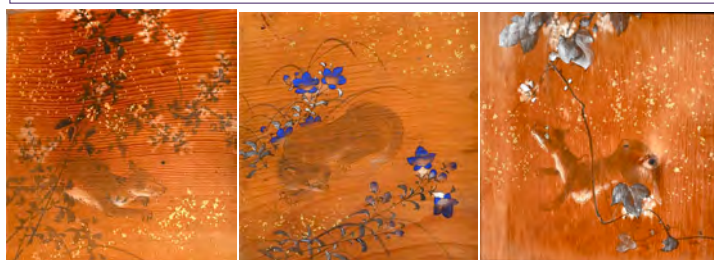
《絵師はだれだったのか》



元相馬中村藩御用絵師伏見東洲(1841-1921)は中時宮司とほぼ同じ時代を生き、相馬周辺に襖絵などを多く残している。現存する襖絵（伊賀氏蔵）の虎の表情はオオカミ絵と似ている。相馬出身の彫刻家佐藤玄々(1888-1963)は日本橋三越50周年記念の「天女像まごころ」(1960)の作者だ。1905年に上京する前の数年間東洲から絵を習っている。玄々は1945年東京空襲で家を失い、山津見神社に疎開し「神狗(白狼)」(相馬民族資料館蔵)を完成させている。1905年は天井絵完成年であり、もし東洲が制作に関わっていたならば、玄々の関りも考えられるのではないだろうか

《天井絵の祈願者》

天井絵には、祈願者と思われる名前が記されているものが8枚ある。9名の名前と地名があるが、すべて名取郡、刈田郡で、うち5名は名取郡高館村熊堂とある。現在、熊ノ堂には名取熊野三山があり、紀伊半島熊野の山伏の勧進だとされる。



花が描かれている絵も8枚ある。それらは竜胆、萩、ワタとも見える。現在の高館のシンボル「笹竜胆」は熊野新宮神社から伝わったとされる。萩は祈願者の土地にある宮城野萩か、神社の秋の大祭を祝うものかもしれない

《槻木遥拝所と国井久仙》

明治41年頃柴田郡槻木町に山津見神社遥拝所が国井久仙により建てられた。久仙は山岳参詣者の先達であったこと以外詳細不明である。遥拝所は1989年に解体され、中のものは柴田の郷土館に寄贈された。その中にオオカミ絵馬一枚、中時宮司からのものが、中時宮司の追悼文などがあった。絵馬は天井絵と同じものであり、復元の見本として貴重だ。火災で失われた山津見神社の護符も多数残っている。山津見神社は全国に信者がいるが、上の祈願者とともに、当時の（現）宮城南部に多かったことがわかる。

